体育授業における児童・生徒の学習内容の相違について

中根　なぎさ (兵庫教育大学)

1. 目的

本研究では,小・中学校の児童・生徒を対象に,体育授業の学習内容に関する尺度を用いて，彼らが有する学習内容の相違について検討することを目的とする。

2. 研究方法

質問紙は，横田(2017)が小・中学校の教員に実施した 5 つの体育の目標(身体,技能,認識,社会,情意)をもとに 12 項目に分類した調査用紙を児童・生徒用に修正して用いた。各項目について,「そう思わない」から「そう思う」までの 4 件法を用いて回答を求めた。

1) 対象者：小学生 165 名(A 小学校 77 名，B 小学校 88 名)の児童と中学生 358 名(C 中学校 140 名，D 中学校 218 名)の計 523 名を対象とした。
2) 調査時期：2019 年 11 月から 12 月。
3) 調査内容：小・中学校の校種間に加え，体育の好嫌・運動の好嫌についても検討した。
4) 分析方法：統計ソフト SPSS(statistics ver. 19)の t 検定を用いた。t 検定において，2 群間の平均の差を検定した。平均値の比較は有意確率が 5%のものを差がみられるものとした。

3. 結果と考察

1) 小・中学校での比較

身体目標,その中の「1　健康関連体力の向上」項目と「2　運動関連体力の向上」項目,技能目標の中の「4　スポーツの戦術や戦略の思考・判断」項目の 4 つにおいて，小学校の方が中学校に比べて有意に高い結果であった。一方，認識目標，その中の「6　スポーツの文化」項目の 2 つにおいて，中学校の方が小学校に比べて有意に高い結果であった。これらのことから，小学校では体力向上や戦術学習が，中学校ではスポーツの知識がそれぞれ学び取られ，校種間の相違が確かめられた。

これに関して，先行研究（横田，2017）では,「12 自尊心や自己有能感」項目は小学校の方が,技能目標の中の「3 スポーツの技術の上達・習熟」項目，認識目標，その中の「6 スポーツの文化」項目と「7 体の動きや使い方」項目の 4 つは中学校の方がそれぞれ有意に高い結果であった。

これらのことから,中学校の教員はスポーツの技術や体の使い方の向上を重視しているが，中学校の生徒が有する学習内容として反映されていなかった。逆に,スポーツの戦術については小学校の児童が有する学習内容として反映されていた。また，小学校の教員は自尊心や自己有能感を養うことを重視しているが，小学校の児童が有する学習内容として反映されていなかった。これらの結果は，今後の小・中学校の体育授業を改善していく上で重要な視点になるものと考えられる。

2) 体育の好嫌での比較

小学校で体育の好嫌で比較を行うと,5 つ目標と 12 項目すべてにおいて，体育の好きな児童の方が体育の嫌いな児童に比べて有意に高い結果であった。また,中学校では，5 つ目標と認識目標の中の「6 スポーツの文化」を除く 11 項目すべてにおいて，体育の好きな生徒の方が体育の嫌いな生徒に比べて有意に高い結果であった。

これらのことから，体育の好きな児童・生徒の方が体育の授業において,学習内容を学び取っている可能性が高いものと考えられる。また，運動の好嫌でも同様の結果であり,小・中学校において体育・運動の好きな児童・生徒を育成することが重要になるものと考えられる。

4. 結論

本研究では,体育授業において小・中学校の児童・生徒の学習内容の学び取りに相違があることが確かめられた。どちらの校種においても，体育・運動の好きな児童・生徒を育成することが重要になるものと考えられた。

5. 主な参考文献

1) 横田大二郎(2017)))『体育授業における体系的カリキュラム編成の課題－小中学校教員の教育観の差異を通して－』,兵庫教育大学卒業論文.